現地理解教育で学んだことを授業づくりに生かす

周南市立夜市小学校　教諭　藤本　浩行
（令和３年度派遣　ドイツ　デュッセルドルフ日本人学校）

１．はじめに

令和５年８月 11 日、第 15 回国際理解教育研究中国ブロック大会（島根県松江市）が開催されました。大会テーマは、「多文化共生社会を生きる子どもの育成～松江で国際理解を語る～」でした。テーマ別分科会（海外子女教育）で発表の機会を得ましたので、令和３年度・４年度にシニア派遣教員として、ドイツ、デュッセルドルフ日本人学校で実践したことを発表させていただきました。

私は、長年に渡って小学３・４年生が使用する地域について学ぶ社会科副読本の編集委員の仕事に携わってきました。デュッセルドルフ日本人学校でも、『わたしたちのデュッセルドルフ』の社会科副読本が作成されていました。これは、赴任した教員にとっても現地理解する上で好評でした。

文部科学省から派遣された教員には、現地理解に関するレポートが課せられています。日本で地域教材を生かした授業づくりに取り組んできた私にとっては、興味・関心をもって楽しく取り組ませてもらうことができました。

私が、テーマ別部会で強調したかった点は、「教師自身が地域に出向き、いろいろな人と出会い、授業づくりを行うことを通して、子どもの自己肯定感を高めていった」ということでした。

海外の日本人学校に勤務してみて、子どもたちは好き好んで海外に来ている者ばかりではないことを知りました。親の都合で、仕方なく来ている子どももいます。現地の生活に馴染めず、日本にいる友達とオンラインゲームをして、寝不足で学校に来ている子どももいました。私の校務分掌は教育相談と特別支援教育でした。守秘義務があり、具体的なことには言及できませんが、今までの教職経験を活かし尽力してきました。

２．現地理解教育が自己肯定感を高めることにつながる

日本で地域連携教育を担当し、コミュニティ・スクールの実践に取り組んできました。「地域は大きな学校」「学校の門を開いて」「学校で学んだことを地域で発揮しよう」などの合言葉で、子どもたちと地域の方をつなぐ教育実践を目指してきました。

「あなたは地域の行事に参加していますか」「あなたは、人の役に立っていると思いますか」という質問紙のクロス集計からわかるように、地域の行事に積極的に参加している子どもほど、自己肯定感が高いことが言われています。

このことを根拠に地域教材の授業づくりに取り組んできました。コロナ禍でもあり、例年やってきたようなことはできませんでしたが、全力で取り組んでいきました。

現地理解教育を推進する上で、不可欠なことは管理職の理解です。私は自己目標シートへの記入や面談でも、その必要性を語ってきました。事前に根回しをしたり、企画会や職員会議で提案したりして、手続きを踏んで周知徹底を図ったりしてきました。

社会科副読本に関しては、改訂の年度ではないということで、写真や資料の収集を行って改訂年度への参考資料にしてもらうようにしました。

以下、発表した私のプレゼンの中から２点を紹介させていただきます。

３．道徳科「夢に向かって」　卓球の坪井選手による出前授業

私は、学生時代卓球をやっていました。社会人になっても地域の卓球同好会に所属していました。ドイツと言えば、サッカーが有名ですが、卓球も盛んなスポーツです。水谷隼選手が、中学生の頃からデュッセルドルフの卓球リーグに参加していたそうです。

新しく着任されたデュッセルドルフ日本人学校の理事長渡辺様も、社会人になっても地域のクラブで卓球を行っているそうです。また、デュッセルドルフ日本クラブ主催のソフトボール大会で、ドイツ在住で世界的な卓球メーカーのバタフライに所属されている梅村礼様と知り合いになることができました。梅村様は、全日本選手権を制覇され、アテネオリンピックにも出場され、以前デュッセルドルフ日本人学校でも講演をされた方です。

坪井琢磨選手の出前授業「夢に向かって」

梅村様から全日本男子の卓球チームがドイツに遠征するので、出前授業のお話をもちかけてくださいました。諸事情のために実現しませんでしたが、ドイツ卓球リーグで活躍されている坪井勇磨選手を出前授業に派遣していただけることになりました。

梅村様のお話によると、海外でがんばっている子どもたちに接することにより、選手のモチベーションの高揚にもつながるそうです。

卓球の実技を取り入れた出前授業

私が出前授業を進めていく流儀が７点あります。１点目は、「この人と子どもたちとを出会わせたい」という熱い思いをもつまで、事前の打ち合わせをすることです。実際に卓球の練習場に出向き坪井選手と会い、当日の打ち合わせを行いました。

２点目は、子どもたちがどんなことを学びたいのか、事前指導を行い、出前授業でお世話になる人と子どもとの接点をさぐることです。具体的には、「質問一覧」として送ることにしました。

３点目は、学校の中で周知徹底を図り、決して単独では動かないことです。

４点目は、授業に仕立てることです。今回の場合は、道徳科で「夢に向かって」というテーマで卓球の実技を交えたものでした。学習指導要領の道徳科の価値項目との関連も図りました。

学んだことを「お礼の手紙」で届ける

５点目は、当日は、出前授業でお世話になる方に丸投げするのではなく、時間配分も含めて私が司会進行をしてコーディネートすること

です。

６点目は、お礼の手紙を子どもたちに書いてもらって、届けるということです。

７点目に、起案したものや写真など記録に残します。次年度のカリキュラム立案のときに、参考にしてもらうことです。

当初は、私が担任する４年生だけで実施する予定でしたが、５年、６年生も是非とも一緒にお話を聞きたいということで、３学年合同で本校の体育館で実施しました。

以下、子どもたちのお礼の手紙からの抜粋です。

○　「坪井選手は、わたしたちに『食わず嫌いになってほしくない』という話をしてくださいました。これからもいろいろなことにチャレンジしていきたいと思います。」

○　「お話だけではなく、みんなと卓球をやってくださり、楽しかったです。坪井選手のスマッシュの速さに驚きました」

○　「坪井選手は、海外でプレーする中で、『がんばれ！』の応援がはげみになるということでした。ぼくたちの応援がはげみになることを知ってうれしいです。」

実際に、私も何度か日本人が出場するドイツの卓球リーグの観戦に行きましたが、「がんばれ！」と日本語で応援すると、振り向いてくれることがありました。

日本人学校では、日本では到底で出会うことができない著名人を学校に招聘することができることを聞きます。この貴重な経験を単発に終わることがないように、日々の教育活動につなげていきたいものです。

４．社会科「国際都市デュッセルドルフのよさを伝えよう」出前授業

ドイツの都市アーヘンで、「TOKYO オリンピック」馬術競技の協賛で、「東京音頭」を踊ることになりました。ここで、台湾出身で IT エンジニアとして働いている荘建勛様と知り合いになりました。漫画の「NARUTO ナルト」で津軽三味線の魅力に取りつかれて、日本にも留学された方です。

「東京音頭」を踊る待ち時間に、私が声をかけたことがきっかけで、親しくしていただくことになりました。

使用している４年社会科東京書籍教科書では、「宮城県仙台市」の事例が紹介してあります。友好都市、国際交流が取り上げられていました。

私は、単元名を「国際都市デュッセルドルフのよさを伝えよう」として、地域教材の授業づくりを行いました。（10 単位時間扱い）

まず、教科書で大まかな学習内容、学習方法を学んで、自分たちの住んでいる都道府県で地域の特色を生かして授業を展開していくことがポイントです。

デュッセルドルフとの友好都市

日本にいるときには、社会科副読本の「きょう土山口」を活用しながら学習を展開していきました。日本人学校は、全国各地から集まっている子どもたちなので、そうはいきません。『わたしたちのデュッセルドルフ』の社会科副読本が効果を発揮しますので、内容

の充実が不可欠です。

子どもたちが帰国して、自分の住んでいる都道府県のことを全く学習していないことには、大きな問題があります。

そこで、学級の子どもたちが帰国予定の都道府県を把握し、１学期から計画的に、NHK for School「見えるぞ！ニッポン」を全員で視聴させたことです。これは、47 都道府県がそれぞれ 15 分間で紹介されている優れた番組です。「Ａくんは〇〇県からやってきました」というように、いろいろな都道府県を学ぶことができる利点があります。他の子どもよりも、自分が住んでいた都道府県のことをよく知っているのでＡくんを生かすことができ、自己肯定感の向上にもつながっていきました。

あくまでも、基盤となるのは、実際に住んでいるデュッセルドルフです。日本の都道府県とドイツの各州を同一には扱うことができませんが、ノルトライン・ヴェストファーレン州の州都でもあるデュッセルドルフについて学習する必要があります。

社会科を学ぶ合言葉として「人・コト・モノ」が言われます。人として、デュッセルドルフで知り合った台湾出身の荘建勛様を中心に授業づくりを考えました。話を持ち掛けたところ、快諾してくださいました。

調べ学習をする上で、子どもたちの興味・関心は不可欠です。

日本人学校の小学部では、教科担任制が導入されていて、私は、４年１組、２組の両方の社会科を指導していますので、どちらの学級も子どもたちの興味・関心ごとにグループを作って、調べ学習をさせていきました。

特技の三味線を披露してくださる場面

１組は、「ドイツに住む日本人」「有名な食べ物」「キルメス（移動遊園地）」「観光地ラインタワー」「サッカーチームフォルトナデュッセルドルフ」「ライン川」

２組は「日本デー」（人数が多いので、AとBの２つのグループに分けました）」「デュッセルドルフの自然」「観光地」「ラインタワー」「お菓子のハリボー」「名物」

３、４名の人数のグループで構成し、１分×人数を目安に発表時間を設定しました。タブレットが導入されているので、両組の発表は、相互に視聴させることにしました。

日本人学校に赴任する前は、インターネットを活用した現地と日本との交流を考えていましたが、時差の問題、個人情報の観点から、簡単にはできないことがわかりました。比較的に、手軽にできることは、複数の学級のある場合は、自分たちの作った作品を互いに視聴し合って学び合うことです。発表は、タブレットを活用させて動画にすれば可能になります。また、来年度の４年生に向けて、動画を残していけば、どんな学習をするのかという動機付けにもつながります。

「灯台下暗し」とはよく言ったものです。海外に住んでいて、外国旅行に目を向けていますが、実際に自分たちの住んでいるデュッセルドルフについては、あまり知らないものです。この単元の一部は、授業参観でも公開しましたが、保護者の方にも好評でした。あ

る保護者の方は、「知人がデュッセルドルフに来た時に、どんなところを案内しようかということを親子で考える契機になりました。親子で調べています」という感想をいただきました。子どもたちも、興味・関心のあるテーマでグループ編成をしているので、楽しく生き生きと調べ学習に取り組んでいました。

自分たちの行っている学習が、いろいろな場面で役に立っているので、自己肯定感が上がっていきます。教師自身も子どもたちと一緒に、自分たちの住んでいるデュッセルドルフについて調べることができ現地理解教育の大切さを改めて感じました。

５．おわりに

教師自身が現地理解教育のために、積極的に地域に出て交流していく契機になったことは、デュッセルドルフ日本人学校と姉妹校であるツェツィーエン・ギムナジウムとの食を通した交流です。毎年、両校の教職員による「一品持ち寄り」の交流会が開催されます。買って来ても、作って来てもよいそうで、ドイツの家庭料理を食べることができます。現地の方も、日本料理を楽しみにしておられるようです。

新型コロナ感染防止の一部が緩和され、このイベントが開催されることになり、食を通じた交流に関心のある私は、大変楽しみにしていました。

そうめん流しのパフォーマンス

飲食を共にする交流は、音楽あり、余興ありで楽しいものです。この場を通して、人と出会い、いろいろな企画が生まれます。

実際に、ツェツィーエン・ギムナジウムで日本語を教えられているＳ先生と授業を見せ合うことになり、実現しました。

寿司や焼きそばの日本食が人気でした

手作り料理を食べることができることは、相手を信頼しているからできることであり、「美味しい！」と笑顔で食べることによって、人間関係が良好になることは間違いありません。

子どもたちに現地理解教育の大切さを教えるためには、教師自身が積極的に現地に住んでいる方とふれあうことは言うまでもありません。私自身も、この交流会からたくさんの人との出会い、授業づくりのヒントを得ることができました。

ちなみに、ドイツの学校の保護者会ではケーキやお菓子を焼いて持ち寄って話し合うということです。また、誕生日には、本人がケーキなどを焼き、みんなに振る舞うことがドイツ流のスタイルということです。現地採用のドイツ語を教えてくださる先生方の手作りケーキやお菓子などを美味しくいただきました。

最後になりましたが、令和６年８月８日、９日「全国海外子女国際理解教育研究大会」を兼ねて、中国ブロック大会が鳥取県米子市で開催されることをお伝えします。